

天 界 新 知 識

中亞トルケスタイン地方の天氣の週期性

アジアの中央部の所謂トルケスタン地方や、黒海の東岸あたりの天氣を、ソ連邦の V. A. Blagoveschensky 氏が研究した所によると、米國のワシントン府にあるスミソニヤン學院の天文臺長 C. G. Abbot 氏が永い以前から調査してゐる如く、太陽の熱輻射と密接な關係があることが知れた。

ブラゴエスチエンスキ氏の研究によれば、毎日の極小溫度には約18ケ日の主要週期が著しく、例へば、一週期の初め3~4日はほぼ一定の低溫を保つてゐるが、其の後は漸次極小溫度が上昇し、9~10日頃から又々急に下降するといふのであるが、こうした變化は全年を通じて現はれる由である。何としても、氣象學者は、各國各地に於いて、もつともマジメに天候と太陽との關係を研究すべきであらう。

グイス・レイキ隕星について

米國の南カリフォニヤ大學の F. C. Leonard 教授の研究によれば、カリフォニヤ州の東北隅にある Goose Lake の西岸から尙ほ西方2マイルの所で、1938年十月13日に發見された一隕星は、目下國立スミソニヤン學院の所有品として、ワシントン府にあり、重量は1167キロ瓦である。稀硝酸で其の一部分を處理し検査したところでは、キドマンステチン像が見えてゐて、明らかに之れは八四晶型の隕鐵である。

種々の色の光りが進む速度について

宇宙を傳はる星の光の中で、赤や青や黄など、いろいろの色の光りが傳はる速度は違ふのだらうか、同じだらうかといふ問題の研究のために、アルゴル型や、セフェウスの變星の觀測が以前から利用されてゐるが、最近にも米國アマスト大學のホール (J. S. Hall) 氏がフィラデルフィヤ市郊外のスワイスモア天文臺で、アルゴル星から來る波長 5599 Å 及び 8060 Å の二種の光りを研究したところ、兩波長について、極小光輝の時刻に3分時以上の差が無かつたといふ。アルゴル星の距離は 195 光年即ち 55000000 分であるから、光波の速度には 55000000 分ノ一以上の差が無いわけである。

蝸座 U 星は週期新星

さきに蛇遣ひ座 RS 星が再輝した如く、所謂“新星”といふものの中には、

只一回きりの増光でなしに、時々繰り返し光が増すものもあることが明らかとなつた。近着報告によれば、1863年五月20日にポクソン氏が鞆座に9等級として発見した U 星は、位置赤経 $16^h 14^m 10^s$ 赤緯 $-17^\circ 31'.9$ (但し分點は1855年) であるが、近頃、米國ハーロッド天文臺のトマス Helen L. Thomas 夫人が1906年の寫眞にも、又、1936年の寫眞にも 8.8 として発見した。即ち

観測者	光度	日 附	観測回数
Pogson 氏	9.1	1863年5月20日	8
〃	12.4	〃 〃 28日	
Thomas 女史	8.8	1906年5月12日	1
〃	8.8	1636年6月22日	10
〃	15.2	〃 7月21日	

今後此の星を一般の變星観測者は注意せられたい。

サムソン博士逝去

去る十一月7日、英國の R. A. Sampson 博士が逝去された。享年73歳である。博士は若い頃ダラム大學天文學教授であり、1910年から1937年までは、スコットランドの天文博士としてエデンボロ市ブラクフォードにある國立天文臺の臺長であつた。精密時計の研究や、木星衛星の軌道や、恒星のスペクトルの研究などで有名であつた。自分は1924年11月21日にブラクフォード天文臺に同博士を訪ね、多忙の博士から、いろいろの設備を見せて貰つたことがある。

(天界第5卷第338頁参照——山本)

ブルコワ天文臺の創立一百年祭

かねて本誌に記した如く、ロシア國に於ける最も重要なブルコワ中央天文臺は、1939年に創立されたもので、當時としては世界第一の“15吋”大望遠鏡を備へ、爾來、今日まで其の傳統を守りつづけて、今尚ほ歐洲第一流の天文臺たる地位を失はないが、去る1939年十二月25日には盛大な創立一百年を祝賀する種々の催ほしが行はれた。多くの論文が朗讀された中には、同天文臺の輝やかしい歴史を語る幾多のものがあつたが、ソ聯國自身が目下戰亂中にあるので、諸外國からの祝賀参加者は少なかつた。自分も1936年の日食當時から招待されてゐたが、此の際は遠慮した。因みに、此の百年祭記念の一大論文集が近く發刊される筈である。(山本)

公 告 今回、本誌の黄色紙附録「天文カレンダー」の別刷を希望者に頒ちます。但し、10部以上の豫約者に限る。實費1部3錢の割。(會員には2錢)。ほかに送料——東亞天文協會事務所